

平成22年度 岩手県農業研究センター試験研究成果書

区分	指導	題名	県北地域における夏秋ギク系小ギクの長期継続出荷法						
[要約] 県北地域において、4月下旬定植(慣行作型)に、2番穂を利用した5月下旬定植、整枝時に摘除する側枝を活用した6月下旬定植の作型を組み合わせることにより、夏秋ギク系小ギクの同一品種による8月上旬~9月上旬の継続出荷が可能である。									
キーワード	作付体系	長期継続出荷	同一品種	無摘心栽培	県北農業研究所 園芸研究室				

1 背景とねらい

小ぎくは県北地域においても近年生産拡大しており、今後個別経営の規模拡大や産地としての生産拡大を図るためには、物日以外の需要にも対応した長期継続出荷体制を構築する必要がある。

一般に小ぎく栽培では物日需要期で確実に出荷するため品種を多数導入しているが、物日出荷に間に合わない品種も多く、これらを出荷することで継続出荷に対応している。しかし、8月下旬~9月上旬にかけての需要の少ない時期においては、できるだけ管理労力や経費をかけない方法で栽培することが望ましく、8月盆に間に合う品種の作期を拡大することによる対応が可能と考えられる。

そこで、県北地域において夏秋ギク系小ギクの同一品種による8月上旬~9月上旬の継続出荷法について明らかにする。

2 成果の内容

(1) 県北地域において図1の作型を組み合わせることにより、夏秋ギク系小ギクの同一品種による8月上旬までの継続出荷が可能である(図1,2、表1)。

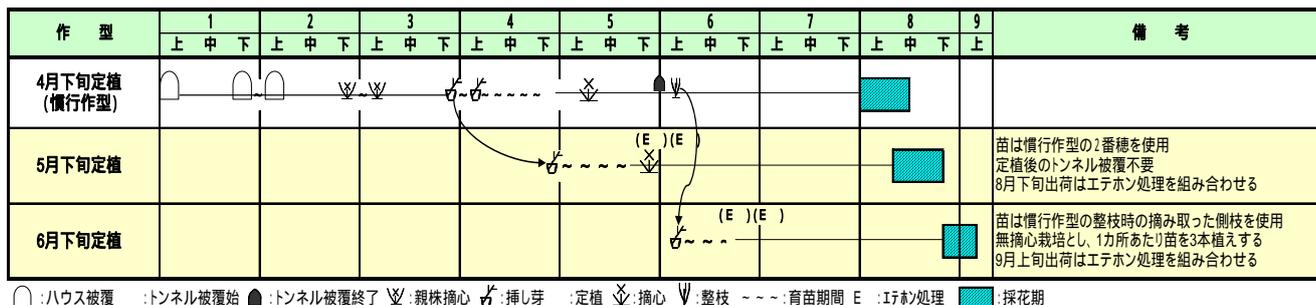


図1 夏秋ギク系小ギクの長期継続出荷作型

3 成果活用上の留意事項

- (1) 小雨 を使って得た結果である。品種選定にあたっては切花長を確保しやすい品種を使用するが、現地において各作型への適応性を検討した上で導入する。
- (2) 5月下旬定植用の採穂株として使う慣行作型の親株は、早期着蕾や短茎化の原因となるので、1番穂採穂後は高温管理しない。また、定植後のトンネル被覆は不要であるが、霜害の恐れがある場合は不織布等によるべた掛けや定植日を数日遅らせるなどの防霜対策を講ずる。
- (3) 6月下旬定植の作型は無摘心栽培で1カ所3本植とするため、育苗はセルトレイに1セル当たり3本挿しとするなど育苗培土のコスト低減に努める。

4 成果の活用方法等

- (1) 適用地帯又は対象者等 県北地域における小ぎく栽培を指導する普及員等指導者
- (2) 期待する活用効果 8月~9月上旬まで同一品種での継続出荷体系を導入する際の参考となる

5 当該事項に関する試験研究課題

(H19-53) 県北地域における小ぎくの安定生産技術の確立 [H19~H22/県単]

6 研究担当者 川戸善徳

7 参考資料・文献

- (1) 平成13年度 試験研究成果「夏秋ぎく系小ぎくの親株加温による作期の前進」
- (2) 平成16年度 試験研究成果「小ぎく「アイマム」シリーズに対するエテホン処理による開花調節効果」
- (3) 平成19年度 試験研究成果「小ぎく「アイマム」シリーズに対する簡便な作期遅延技術」
- (4) 平成20年度 試験研究成果「県北地域における9~10月出荷用小ぎくの栽培体系」

8 試験成績の概要（具体的なデータ）

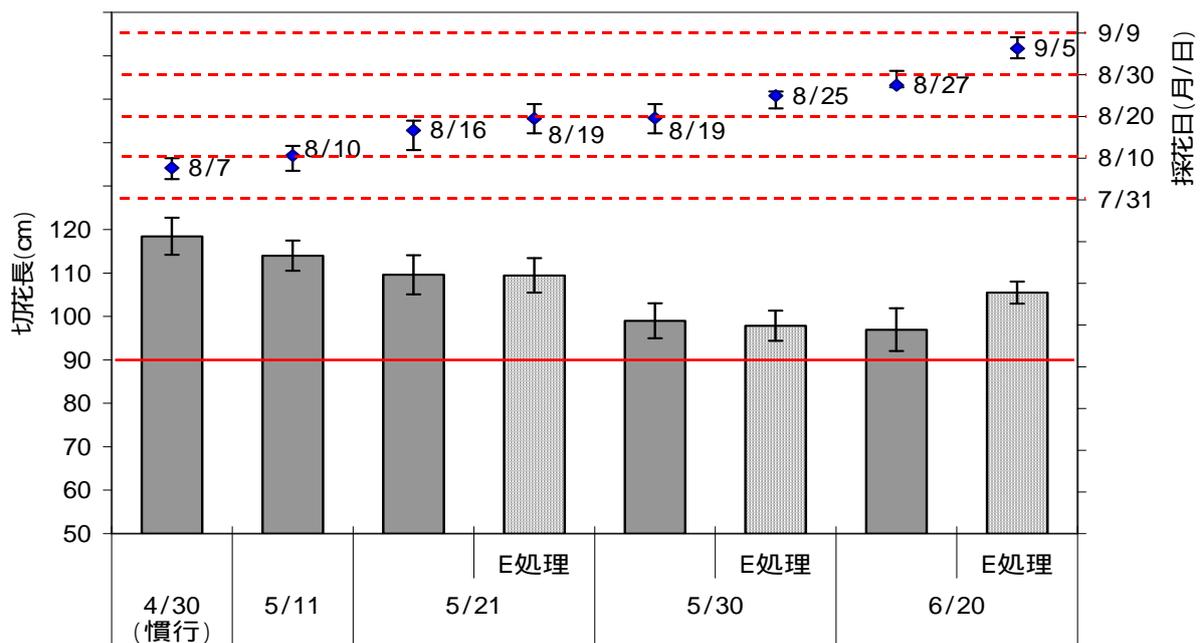


図2 定植時期の違い及びエテホン処理の有無と採花期及び切花長の関係（品種；小雨（白））（H20,21,22）
 （注）E処理はエテホン処理。図中のエラーバーは切花長が標準偏差、採花日が採花期間（始期～終期）。採花日は盛期日（50%到達日）
 切花長は90cmを指標値とした。（参考；岩手県出荷規格 2L;80cm、L;70cm、M;60cm、湿式輸送の場合70cmと60cm）

【摘要】

採花期は定植時期に応じて遅れた。1作型当たりの採花期間は5～7日間であった。
 切花長はどの時期の定植でも概ね90cm以上を確保できる。

表1 切り花品質（品種；小雨（白））（H20,21,22）

定植時期 (月/日)	採花日 (月/日)	切花長 (cm)	葉数 (枚)	切花重 (g)	茎径 (mm)	側枝数 (本)	栽培期間 (日)	備考
4/30(慣行)	8/7	118 ± 4	45 ± 2	83 ± 14	5.8 ± 0.5	12 ± 2	100	
5/11	8/10	114 ± 3	44 ± 2	78 ± 17	5.7 ± 0.5	12 ± 2	92	
5/21	8/16	110 ± 5	41 ± 2	71 ± 13	5.5 ± 0.5	12 ± 1	88	
E処理	8/19	109 ± 4	49 ± 2	63 ± 14	5.3 ± 0.4	12 ± 2	90	H21,22
5/30	8/19	99 ± 4	39 ± 2	60 ± 10	5.1 ± 0.4	12 ± 2	81	
E処理	8/25	98 ± 3	49 ± 3	46 ± 10	5.0 ± 0.4	14 ± 2	84	H22
6/20	8/27	97 ± 5	47 ± 3	82 ± 22	5.7 ± 0.4	16 ± 3	68	H20,21
E処理	9/5	106 ± 3	63 ± 3	92 ± 20	5.9 ± 0.4	19 ± 3	76	

（注）農作物調査基準（岩手県農業研究センター、平成14年3月）による。±は標準偏差

採花日は盛期日（50%到達日）

栽培期間は、定植日から採花日までの日数。

【供試条件】

調査場所：東北農業研究所場内圃場（標高230m）

親株管理：ハウス＋内張り＋トンネルの3重被覆（2月初旬開始）を行い、4月以降はトンネル除去、5月以降は内張り除去。

挿し芽：200穴黒色セルトレイ（培土；レディアールライト）に1本／穴挿し（無摘心作型は3本／穴挿し）

挿し穂は、4/30及び5/11定植は1番穂、5/21及び5/30定植は2番穂、6/20定植は慣行作型の整枝時の摘除枝を用いた。

施肥量：窒素成分で10kg/a（H20,22）12kg/a（H21）

栽植距離：45cm×8cm、2条植え 3本仕立て（無摘心作型は1カ所3本植え） 黒マルチ使用

エテホン処理：エテホン液剤「商品名；エスレル10」の500倍希釈液（ethephon 200ppm溶液）を茎頂部に噴霧した（摘心時と10日後の2回散布）。